

緑が丘二丁目遺跡

(山梨県甲府市緑が丘2丁目2-12地点)

—都市計画道路新環状・緑が丘アクセス線街路事業に伴う発掘調査報告書—

2023

山梨県中北建設事務所
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

序

四方を急峻な山々に囲まれた山梨県のほぼ中央に位置する甲府市は、豊かな自然と悠久の歴史をあわせ持った都市です。最も標高の高い地点は、奥秩父の名峰金峰山の頂上 2,599 m であり、最も標高の低い地点は笛吹川が支流と合流する大津町付近で、標高 250 m を測ります。その差約 2,350m。この標高差が織りなす豊かな自然が甲府市の強みと言えます。

遺跡の名称にもなっている「緑が丘」という地名は、平和を願い緑に満ちた住宅地の建設を目指して名付けられた地名ですが、その背景にはこの地域一帯が日本陸軍の歩兵第四十九連隊の練兵場だった歴史があります。また、周辺では縄文土器が出土することから、5,000 年前の縄文時代には人々が生活を始めたようです。さらに、本書で報告する調査地点の北東 400 m の地点からは、8 万年以上前の地層からナウマンゾウの化石が出土したという報告もあり、悠久の歴史を感じることができる地域だといえます。

今回の調査では、古墳時代に住んだ人々の生活の一部を垣間見ることができ、8 万年の歴史のなかの 1 ページとして古墳時代が存在することがわかります。

末筆となりましたが、発掘調査を実施するにあたり、ご理解とご協力を賜りました地元関係者の皆様に心から厚く御礼申し上げます。

令和 5 年 3 月

甲府市教育委員会

教育長 數野保秋

例 言

1. 本書は、山梨県甲府市緑が丘2丁目2-12他に所在する緑が丘二丁目遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は道路建設事業に伴い、事業者である山梨県中北建設事務所の費用負担により実施した。
3. 発掘調査と整理報告書作成業務は、甲府市教育委員会が主体となり、業務委託を受けた昭和測量株式会社が実施した。
[調査体制]
調査担当者 平塚洋一（甲府市教育委員会）
小谷亮二・藤巻浩太郎（以上昭和測量株式会社文化財調査課）
調査顧問 新津健（昭和測量株式会社文化財調査課研究顧問）
発掘従事者 飯沼源治・加藤俊哉・佐野香織・佐野叔也・内藤敏夫・三木一恵
整理従事者 齊藤里美・佐野香織
4. 発掘調査は令和3年11月5日から令和3年12月13日まで行った。整理報告書作成業務は令和4年7月19日から令和5年1月31日まで、昭和測量株式会社文化財調査課事務所内で行った。
5. 本書に関わる遺構写真は小谷亮二・藤巻浩太郎が撮影した。遺物写真は、藤巻浩太郎が撮影した。
6. 本書の編集は藤巻浩太郎が行った。執筆分担は以下の通りである。
第1章第1節：平塚洋一（甲府市教育委員会）
その他の執筆は藤巻浩太郎が行った。
7. 本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲府市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 本書で使用した地図は国土地理院発行の地形図『甲府』1/25,000、甲府市役所発行の都市計画基本図1/2,500である。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3. 遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4. 遺構平面図のX・Y座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5. 遺構断面図の数値は、標高（T.P.）を示す。単位はメートルである。
6. 土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。
7. 発掘調査では以下の遺構記号を使用した。遺構番号は種別ごとに番号を付した。
溝状遺構：S D 性格不明遺構：S X
7. 遺物番号は出土地点にかかわらず連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
8. 遺構平面図における一点鎖線は攪乱である。遺構断面図における破線は推定線である。
9. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーンの凡例は以下の通りである。

石断面  須恵器断面 

本文目次

序			
例言			
凡例			
第1章 調査の経過	1	第3章 調査の方法と層序	6
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 調査の方法	6
第2節 発掘作業の経過	1	第2節 基本層序	6
第3節 整理等作業の経過	2	第4章 調査の成果	8
第2章 遺跡の位置と環境	3	第5章 総括	22
第1節 地理的環境	3	第1節 緑が丘二丁目遺跡の遺構について	22
第2節 歴史的環境	3	第2節 出土高環に見られる成形技法	22

挿図目次

第1図 本調査地点と既往の調査範囲	2	第9図 B-1地点遺構図(1)	14
第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図	4	第10図 B-1地点遺構図(2)	15
第3図 明治24年地形図 昭和4年追測	5	第11図 B-1地点遺構図(3)	16
第4図 基本層序	7	第12図 B-2地点遺構図(1)	17
第5図 調査地点全体図	10	第13図 B-2地点遺構図(2)	18
第6図 A地点遺構図(1)	11	第14図 遺構出土遺物(1)	19
第7図 A地点遺構図(2)	12	第15図 遺構出土遺物(2)	20
第8図 A地点遺構図(3)	13	第16図 高環の成形	23

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	4	第2表 遺物観察表	22
-------------	---	-----------	----

写真図版目次

図版1 調査区全景	図版5 B地点(2)
図版2 A地点(1)	図版6 遺物(1)
図版3 A地点(2)	図版7 遺物(2)
図版4 B地点(1)	

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

山梨県中北建設事務所により、都市計画道路新環状・緑が丘アクセス線が計画され、令和3年10月1日付け中北建第13180号により埋蔵文化財発掘の通知について提出を受けた。令和3年10月1日付け教経由第71号により、甲府市教育委員会教育長から山梨県教育委員会教育長へ進達し、令和3年10月25日付け教学文第2914号により周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について通知を受け、遺跡の遺存状況・内容を確認するため試掘・確認調査をするよう通知を受けた。

中北建設事務所と甲府市教育委員会による協議の結果、中北建設事務所により重機の提供を受け、試掘調査を実施することとなった。令和3年8月2日、対象地約310㎡に2×2mの試掘調査トレンチを4か所（便宜的に南から1・2・3・4トレンチとした）設定し、試掘調査を実施した。調査の結果、すべてのトレンチから土器が出土し、特に南側の調査区からは溝状の堆積が確認でき、古墳時代前期の甕の底部が出土した。そのため中北建設事務所と協議し、甲府市緑が丘二丁目204-2、205-3、210-2の約310㎡を本発掘調査の対象として設定した。

甲府市教育委員会が、山梨県観光文化部文化振興・文化財課の指導に基づき、文化財保護法第99条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」の通知を山梨県に提出し、本発掘調査に着手した。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は令和3年11月5日から12月13日の期間で実施した。準備工を含む調査概略は以下の通りである。

また、発掘調査期間中の12月11日に現場説明会を開催し、市内外からおおよそ80名が参加した。

調査日誌抄録

令和3年

- 11月4日（木）調査準備。近隣住民挨拶。
- 11月5日～12日 A-1地点 発掘調査
- 11月5日（金）重機・仮設トイレ搬入、A-1地点表土掘削
- 11月11日（木）生活面（硬化面）検出
- 11月12日（金）壁面・ベルト実測、完掘写真撮影、A-1地点埋戻し
- 11月12日～18日 A-2地点 発掘調査
- 11月12日（金）A-2地点表土掘削
- 11月15日（月）遺構検出状況撮影、遺構掘削、実測
- 11月16日（火）溝状遺構掘削
- 11月19日（木）完掘撮影
- 11月29日（月）A-2地点埋戻し
- 11月19日～11月26日 B-2地点 発掘調査
- 11月19日（木）B-2地点表土掘削
- 11月22日（月）遺構検出状況撮影
- 11月23日（火）溝状遺構検出、掘削
- 11月25日（木）実測、完掘撮影
- 11月26日（金）B-2地点埋戻し
- 11月26日～12月13日 B-1地点 発掘調査



現場説明会開催風景

- 11月26日(金) B-1 地点表土掘削
- 11月29日(月) B-1 地点表土掘削
- 12月6日(月) 集石遺構撮影、計測、調査区東・北壁分層、撮影
- 12月7日(火) 溝状遺構掘削
- 12月9日(木) 完掘撮影
- 12月10日(金) 計測、実測、撮影
- 12月11日(土) 現場説明会を開催
- 12月13日(月) B-1 地点埋戻し・原状復旧。仮設トイレ・重機を撤出。現場を撤収。

第3節 整理等作業の経過

整理・報告書刊行業務は、令和4年6月20日から令和5年1月19日の間、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社文化財調査課の事務所内にて行った。

整理作業は遺物の水洗・注記から開始した。遺物の接合・選別作業と進め、実測とトレース、写真撮影などの記録作業を行った。現場の調査写真や遺構図面についても順次整理作業を進め、遺物観察表の作成、報告書の挿図・図版の編集、本文執筆と作業を進め、令和5年1月31日に報告書を刊行した。



第1図 本調査地点と既往の調査範囲

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

甲府盆地は北に奥秩父山塊を背負い、西に南アルプス、南を御坂山塊によって区切られ、周縁には御勅使川扇状地、釜無川扇状地、金川扇状地など多くの複合扇状地が形成されている。

緑が丘二丁目遺跡は荒川支流の相川によって形成された相川扇状地上に立地している。相川扇状地一帯は天然の要害地形となっており、戦国期には武田氏居館（躑躅ヶ崎館）や要害城、湯村山城が築造されている。

明治40年（1907）若尾民造の用地寄付により歩兵第49連隊（通称 甲府連隊）が誘致され、調査区一帯には練兵場・射撃場が置かれた。敗戦に伴い兵舎等の一部を除いて撤去され、現在では学校・スポーツ公園等に活用され、周辺一帯は宅地化している。

今回の発掘調査は新山梨環状道路へアクセスするための道路建設に伴うものとなっており、調査地は現状では駐車場として利用されている。

第2節 歴史的環境（第2図）

旧石器時代

周辺では、キャンプサイトとみられる遺跡は知られていない。八幡神社遺跡（54）ではナイフ形石器や切出形石器など4点の石器が見つかったが、石器のみで剥片は無く、居住地とは考えられていない。他に、緑が丘スポーツ公園東側の相川の河床でナウマンゾウの臼歯の化石が発見されている。出土した地層から8万年以上前のものと推定されており、当時の環境の一端を窺い知ることができる。

縄文時代

散布地と位置付けられる遺跡がほとんどであり、本遺跡に隣接する緑が丘一丁目遺跡（2）のほか荒川扇状地上の榎田遺跡（28）、塚本遺跡（30）などで縄文前期後葉～後期の土器が出土しているが、何れも摩耗が著しいため洪水などによる上流域からの混入とみられる。また前出の八幡神社遺跡では、主に中期中葉から後葉の土器や土偶が出土した他、黒曜石を主体とする石器や剥片が大量に出土しており、石器製作跡と位置付けられている。また天神北遺跡（35）では縄文時代中期の遺構・遺物が検出されている。

弥生時代

早期、前期の遺跡は本遺跡周辺では確認されていない。後期以降では遺跡数が増加し、古墳時代や平安時代まで継続する複合遺跡も多く、塩部遺跡（18）、音羽遺跡（22）、八幡東遺跡（20）などが所在する。

古墳時代

本遺跡の所在する緑が丘二丁目遺跡（1）、南に位置する塩部遺跡などが代表的な集落遺跡である。緑が丘二丁目遺跡（2017年度調査）では、弥生後期末から平安の竪穴建物を合わせて14軒、掘立柱建物を3軒検出している。中には排水溝を持つ竪穴建物（古墳後期）やカマドをもつ平地式建物（奈良）なども報告されている。塩部遺跡も弥生後期から平安まで継続する集落遺跡である。複数地点で発掘調査が実施されており、これまでに報告された竪穴建物・掘立柱建物などの建物の総数は148軒にのぼる。甲府工業高校地点では4世紀後半とされる方形周溝墓の周溝からウマの歯が出土した他、駿台甲府学園地点では古墳時代の溝からウシの臼歯が出土している。また、古墳時代後期の流路から織機の部材と推定される木製品をはじめとして多数の木製品が出土している。古墳としては、本遺跡周辺に所在する和田無名墳のほか、甲府盆地北側の湯村山山麓に湯村山古墳群（4～9）、万寿森古墳（11）、大平1号（23）・2号墳（24）などが位置しているほか、湯村山の北西に位置する羽黒山山頂には6世紀代の築造とされる県内最大の積石塚古墳である天狗山古墳（38）がある。天神北遺跡では古墳時代前・中期頃の円墳の周溝と思われる溝跡が検出されている。

古代

奈良・平安時代では、周辺は『和名類聚抄』にみえる巨麻郡9郷のうち、青沼郷に属すると推定される地



第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	緑が丘二丁目遺跡	縄文～平安	集落跡	19	富士見遺跡	古墳・平安	散布地	37	羽黒無名墳	古墳	古墳	55	コツ塚古墳	古墳	古墳
2	緑が丘一丁目遺跡	古墳	集落跡	20	八幡東遺跡	弥生・古墳	散布地	38	天狗山古墳	古墳	古墳	56	お塚さん古墳	古墳・平安	古墳
3	和田無名墳	古墳	古墳	21	神田遺跡	弥生～平安	散布地	39	西大阪B遺跡	平安	散布地	57	山梨大学遺跡	奈良・平安	包蔵地
4	湯村山1号古墳	古墳	古墳	22	音羽遺跡	弥生・古墳	散布地	40	天神平遺跡	平安	散布地	58	武田城下町	中世	城下町
5	湯村山2号古墳	古墳	古墳	23	大平1号墳	古墳	古墳	41	若宮前遺跡	平安	散布地	59	武田氏館跡	中世	城館跡
6	湯村山3号古墳	古墳	古墳	24	大平2号墳	古墳	古墳	42	居村村上遺跡	縄文・平安	散布地	60	西前田A遺跡	中・近世	散布地
7	湯村山4号古墳	古墳	古墳	25	塩沢寺裏無明墳(碁石塚)	古墳	古墳	43	西河原遺跡	縄文・平安	散布地	61	西前田B遺跡		散布地
8	湯村山5号古墳	古墳	古墳	26	金塚西遺跡	古墳	古墳	44	穴塚古墳	古墳	古墳	62	日影遺跡		散布地
9	湯村山6号古墳	古墳	古墳	27	西大坂A遺跡	縄文	散布地	45	平石遺跡	平安	散布地	63	御馬屋小路A遺跡	中世	散布地
10	湯村山城跡	中世	城館跡	28	榎田遺跡	弥生～平安	散布地	46	前田遺跡	中世	散布地	64	御馬屋小路B遺跡		散布地
11	万寿森古墳	古墳	古墳	29	加牟那塚古墳	古墳	古墳	47	村上B遺跡	古墳	散布地	65	土屋氏館跡	中世	城館跡
12	向田A遺跡	弥生～古墳	散布地	30	塚本遺跡	古墳	散布地	48	村上J遺跡	古墳	散布地	66	長閑遺跡	中世	包蔵地
13	向田B遺跡		散布地	31	証文塚古墳(消滅)	古墳	古墳	49	村上H遺跡	古墳	散布地	67	甲府城下町遺跡	近世	城下町
14	三光寺山遺跡	古墳・平安		32	跡部塚古墳	古墳	古墳	50	村上A遺跡	平安	散布地	68	甲府城跡	近世	城館跡
15	村之内遺跡	古墳～平安	散布地	33	跡部遺跡	古墳	散布地	51	村上I遺跡	平安	散布地	69	不動遺跡	近世～	散布地
16	永井遺跡	古墳・平安	散布地	34	天神西遺跡	古墳	散布地	52	村上K遺跡	平安	散布地	70	峰本南A遺跡	近世	寺院跡
17	十二天遺跡	平安	散布地	35	天神北遺跡	古墳・平安	散布地	53	大手下遺跡	縄文	散布地	71	峰本南B遺跡	近世	散布地
18	塩部遺跡	弥生～平安	集落跡	36	御蔵前遺跡	古墳・平安	散布地	54	八幡神社遺跡	縄文	散布地				

第2図及び第1表は、甲府市教育委員会『甲府市遺跡地図』（平成4年）、敷島町教育委員会『敷島町 遺跡詳細分布調査報告書』（平成6年）をもとに、現在までに範囲等の情報が更新された遺跡については、更新後の情報を反映して作成し、山梨県教育会西山梨郡支会『西山梨郡志』（大正15年）、甲府市役所『甲府市史 史料編 第1巻』（平成元年）、山梨県埋蔵文化財センター『山梨県遺跡地図（デジタル版）』（平成14年）をもとに、現在までに消滅した古墳の参考位置を追記した。

域である。天平勝宝3年(751)以前に貢進されたとされる正倉院宝物の布に「巨麻郡青沼郷」の墨書銘があり、8世紀の中頃には、青沼郷が成立していたとみられる。上述した緑が丘二丁目遺跡や塩部遺跡などでも平安時代の遺構が検出されている。

中・近世

本遺跡の東部に所在する武田城下町遺跡(58)は、武田信虎が永正16年(1519)に甲府市東部に位置する川田館から躑躅ヶ崎(現在の武田神社付近)へ居館を移したことにより創られた城下町である。躑躅ヶ崎館の北には詰城の要害城、西に支城の湯村山城などを築き、周囲の丘陵に烽火台が設置され要塞化が図られた。緑が丘二丁目遺跡の1994年度調査では、屈葬の人骨が出土した。中世の土坑墓と推定され、北に位置する法泉寺に關係する墓地の可能性もある。法泉寺は武田信武が月舟周勲禪師を招いて創建した寺院である。後には武田信玄が甲府五山の一つに定めたとされ、武田勝頼の菩提寺ともなった。

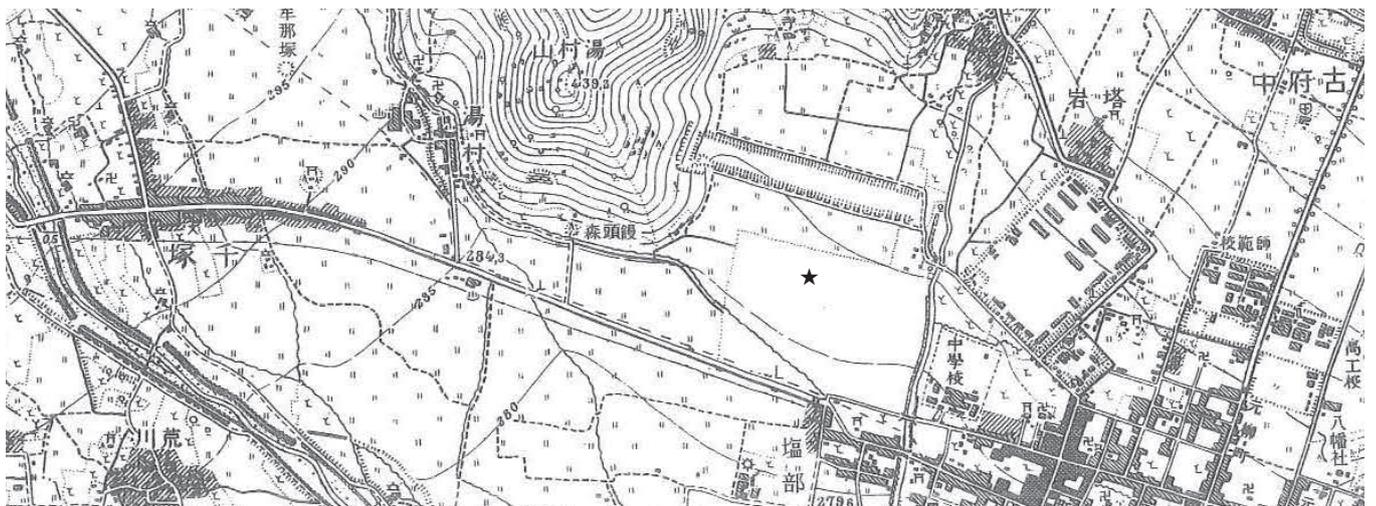
江戸時代では本遺跡は塩部村に所在すると思われる。慶長6年(1601)「北山筋鹽部之郷御繩打水帳」(『西山梨郡志』)では屋敷数19と記録され、主に顕光院、妙本寺、清音寺、かん王寺、慶長院等の寺屋敷と神主屋敷のほか民家6軒と記されている。文化11年(1814年)『甲斐国志』では高1049石、戸20、口67と記録される。調査区周辺は人家の少ない耕作地であった。

近代

明治38年(1905)12月に甲府市会で兵營誘致を陸軍省に上申、甲州財閥の若尾民造と若尾家が積極的に支援し、西山梨郡相川村(現在の甲府市)の土地提供を申告した。明治40年(1907)3月、若尾民造が10万坪の用地寄付、更に若尾地所部によって用地買収を行い12万564坪の土地(現甲府市緑が丘・北新・天神町を含む)が寄付された。12万坪あまりの用地の半分が兵營、甲府衛戍病院、歩兵第49連隊司令部用地となり、残りは練兵場・射撃場となった。本遺跡は練兵場の一角に含まれる(図3参照、調査地点の北に射撃場、東に兵舎や病院がみられる)。

戦後、旧兵營の敷地は国有地・市有地・民有地として払い下げられた。昭和27年(1952)年に県営総合グラウンドが建設されたことを契機に農村の風景が宅地化されていった。旧練兵所跡地に町名はなかったが、昭和29年(1954)年に塩部村・和田村の一部が緑が丘町となった。町名は緑に満ちた住宅地の建設をめざして名付けられている。昭和45年に大和町と緑が丘1・2丁目となっており、現在に至る。

★：調査地点



第3図 明治24年地形図 昭和4年修正測 昭和32年資料修正 (『甲府北部』大日本帝國陸地測量部より抜粋)

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

緑が丘2丁目地内は民家の集中する市街地であり、いずれの調査地点も民家などの駐車場の前にまたがっている。これらを横断して一つの調査区として調査を行うことは困難な状況であったため、調査区の分割によって進入路を確保しながらの調査となった。1～2地点ごとに調査を行っては埋め戻して原状復旧し、次の調査地点に移るといった形で進めた。表土掘削は0.15m³相当のバックホウを用いた。調査で生じた掘削土は緑が丘スポーツ公園北側の道路用地（甲府市和田町2634）へと搬出した。表土掘削時は3tダンプ、人力掘削時は軽ダンプを用いて掘削土を運搬した。掘削土はブルーシートで覆って養生し、近隣への土砂の飛散防止を図った。埋め戻しは掘削土を用いて行き、上面には碎石を敷き均す形で復旧した。重機が稼働する際は交通誘導員を配置し、歩行者や車両の交通の安全確保に努めた。

調査区は東西約3～5m、南北約33mで、調査期間中は調査区への侵入・転落等予防としてブタピン・ネットフェンスで囲いを設けた他、カラーコーン・コーンバー・夜間点滅灯も使用して安全確保に努めた。各地点の遺構検出状況は写真や概略図などで記録した。遺構測量は、土層断面は手描き実測にて行き、平面図はトータルステーションによる測量と写真測量を併用した。写真測量は主にポール撮影で行った。測量図化システムとしてCUBIC社「遺構くん」、写真測量にはAgisoft社「PhotoScan Professional」を用いた。各地点の完掘時には完掘状況の全体写真撮影と合わせてポール写真撮影を行い、「PhotoScan Professional」を用いて地点ごとのオルソモザイク写真を作成した。遺物は原則的にトータルステーションを使用して位置を記録して取り上げた。小片については、遺構出土のものは遺構一括とし、遺構外出土遺物については層位毎に一括して取り上げた。遺構写真撮影には一眼レフデジタルカメラ（NikonD7200）を使用した。調査終了時には甲府市教育委員会の確認を受けた。

整理作業は遺物の水洗、注記、接合と進めつつ、実測遺物を選定した。写真撮影は一眼レフデジタルカメラ（NikonD7500）を用いた。遺物実測は手描きで行った。デジタルトレース、写真データの補正、挿図・写真図版作成、報告書編集作業にはadobe社製「IllustratorCC」、「PhotoshopCC」、「InDesignCC」をそれぞれ使用した。

第2節 基本層序

最終的な遺構検出面とした地山上面の標高は287.5m～288.2mを測る。北から南へ向かって緩やかに低くなる地形である。基本土層として概略図と調査区全体図を図示する（第4図）。基本層序は調査地点の壁面で観察した。攪乱などを除き、一定の範囲で連続する土層を捉えて基本層序を記録した。現表土と近現代とみられる土層はⅠ層、近代から近世とみられる土層をⅡ層、古墳時代とみられる土層をⅢ、Ⅳ層、地山はⅤ層とした。

Ⅰ層は碎石からなる層である。攪乱層に比べ砂の割合が高く灰色粗粒砂を基調とする。水平になるよう堆積しており近現代の造成層とみられる。全ての調査地点で現地表面から15cm程度堆積する。また、A地点においてはコンクリートブロックの混入もみられる。

Ⅱ層はシルト質粘土層である。層の厚さは6～15cm程度で、暗褐色を基調とし水平に堆積する。酸化土を多く含んでいること、第3図にみられる調査地点周辺の土地利用から水田床土と推定される。発掘調査ではこのⅠ・Ⅱ層を重機による表土掘削の対象とした。

Ⅲ層は遺物包含層である。層の厚さは20cm程度であり黒褐色粘土を基調とする。出土遺物から古墳時代前期末から中期初頭の堆積とみられる。

Ⅳ層は地山直上付近に堆積する遺物包含層層である。層の厚さは15～25cm程度で黒褐色粘土を基調とし

ている。石・礫を多く含み、特にA-1地点において遺物の出土が多くみられる。

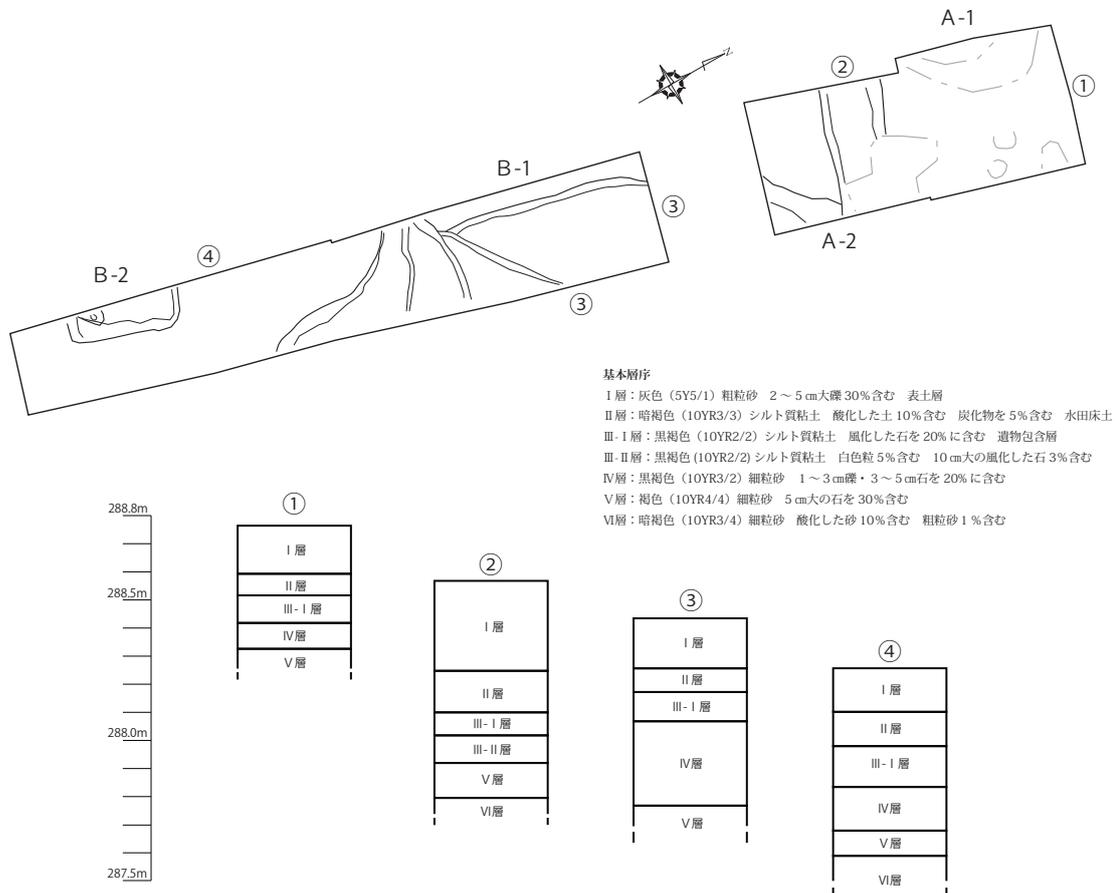
V層は自然堆積層で地山である。最終的な遺構検出はV層の上面で行った。VI層は下層確認による土層となっており褐色中流砂層となっている。

以下、調査地点ごとに層序の概要を記述する。

A地点の地山上面の標高は288.1～288.2mを測る。調査地点をA-1、A-2地点の2つに分けて調査を行った。A-1地点の現表土は造成層(I層)で、その下に近代の水田床土とみられる層(II層)が層厚8cmほど堆積する。その下からは、黒褐色シルト質粘土を基調とする遺物包含層(III層)が層厚10cmで水平堆積する。これらを掘り下げると細粒砂層(IV層)が10～20cm程度堆積し、直下に褐色細粒砂の地山(V層)が露出する。一方、A-2地点ではI層～III層まではA-1地点と同様に検出されるが、他地点と違いIV層はSD1の埋土に確認されるのみである。また、遺物包含層直下の地山(V層)上面で溝状遺構を検出した。

A-1地点では遺構は確認されず、A-2地点の遺構検出は地山上面で行った。

B地点の地山上面の標高は287.5～287.8mを測る。調査地点をB-1、B-2地点の2つに分けて調査を行った。B-1地点の現表土は造成層(I層)で、その下に近代の水田床土とみられる層(II層)が層厚8cmほど堆積する。その下からは、黒褐色シルト質粘土を基調とする遺物包含層(III層)が層厚10～15cmで水平堆積する。これらを掘り下げると溝状遺構の埋土と思われる細粒砂層(IV層)が15～50cm程度堆積する。IV層直下に褐色細粒砂の地山(V層)が露出し、地山上面で段差状となった溝状遺構を検出した。一方B-2地点では、概ねI層の下にII層が堆積するが、調査地点南東部では現代の攪乱を受けているためI層の直下がV層となっている。また、他地点と違いIII層の堆積は遺構内及び狭小な範囲にとどまり、遺物は殆どが遺構内から出土する。



第4図 基本層序と調査区全体図(概略)

第4章 調査の成果

本調査地点は、現在の緑ヶ丘運動公園線の西側で、今回の調査範囲の北部に位置する。現況では県道天神平甲府線道路改良に伴って公有地化されている。駐車場に面しており、車の進入路を確保するため調査は反転掘削で行った。

A地点全体では溝状遺構2条を検出し、B地点全体では溝状遺構2条、性格不明遺構1基を検出した。出土遺物の総量はプラスチックコンテナ(59×38×20cm)2箱に相当する。遺物の年代は「山梨県の考古学編年 4古墳時代の編年」(『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)』、以下「県史編年」と表記)を基準とした。

A-1地点(第6・15図、図版3・30)

[検出状況] 遺構は検出されなかった。調査区北東部は碎石・コンクリートによって攪乱されている。

[出土遺物] 土器が22点出土しており、そのうち3点を図示した。1～3は土師器で1は小型鉢の底部である。2は壺の口縁で、口縁が外反し端部で立ち上がる成形である。県史編年Ⅲ期～Ⅳ期の土器といえる。3はS字状口縁台付甕(以下S字甕)の脚部小片である。裾部を折り返す整形技法が用いられており、S字甕によくみられる技法であるためⅢ期以前の土器といえる。

[時期] 出土遺物の時期は古墳時代前期後葉(Ⅲ期)～中期前葉(Ⅳ期)とみられる。

A-2地点

S D 1(溝)(遺構第8・9・15図、図版4・30)

[位置] 調査区中央に位置する。東部を攪乱され、切り合いではS D 2より新しい。

[形状・規模] 長辺4.7m、短辺2.2m、深さ45cmを測る。調査区外に延びるため平面形の全容は不明だが、東西方向に走る。断面形は緩やかな台形の溝である。

[検出状況・埋土] 地山上面で検出した。埋土は黒褐色粘土を基調とし、10cm大の石を多量に含む。

[出土遺物] 土器が8点出土しており、そのうち2点を図示した。4・5は土師器で高坏の脚部である。5には内面中央に粘土塊で穴を塞いだような痕跡がある。脚部は低く広がるためⅢ期頃のものともみられる。

[時期] 検出状況や出土遺物から古墳時代中期頃とみられる。

S D 2(溝)(第8・9・15図、図版4・30)

[位置] 調査区南東に位置し、切り合いではS D 1に先行する。

[形状・規模] 長辺2.9m、短辺2.1m、深さ36cmを測る。調査区外に延びるため平面形の全容は不明だが、B-1地点のS D 2に接続するとみられる。

[検出状況・埋土] 地山上面で検出した。埋土は黒褐色シルト質粘土を基調とし、下層には石・礫が堆積する。

[出土遺物] 土器が3点出土しており、そのうち2点を図示した。6・7は土師器で、6は高坏、7は壺である。

[時期] 検出状況や出土遺物、他地点の同名遺構の時期から古墳時代前期中葉(Ⅱ期)～前期後葉(Ⅲ期)とみられる。

遺構外出土遺物(第15図、図版30)

遺構外から18点出土しており、そのうち8点を図示した。8～14は土師器である。8は口径が大きい物の器台の可能性があり、9～11は高坏である。9は坏部と脚部の接続部にへそ状に粘土塊が残っており、体部と粘土塊の間に縦位の割れ目がある。10は坏部の内底面が凹み、脚部の内面中央に粘土塊で穴を塞いだような痕跡がある。11は外面を磨いており透孔が残存し、Ⅲ期頃とみられる。12・13は壺である。14はS字甕で口縁部に刺突文がみられないためⅡ期～Ⅲ期のものとみられる。15は須恵器の坏で轆轤成

形がされている。県史編年Ⅳ期以降のものと思われる。

B-1 地点

SD2 (溝) (第10・11・12・16 図、図版5・6・31)

[位置] 調査区を南北方向に縦断する。

[形状・規模] A-2 地点から延び、更に B-2 地点へと続く溝である。長辺 4.7m、短辺 1.6m、深さ 60cm を測る。調査地点外に延びるため平面形の全容は不明である。断面形は緩やかな V 字状で上面は大きく広がっている。

[検出状況・埋土] Ⅲ層から検出した。埋土は黒褐色シルト質粘土を基調とし、溝下半部には黒褐色細粒砂が堆積し、礫・石を多量に含む。

[出土遺物] 土器が 118 点出土しており、そのうち 14 点を図示した。16～29 は土師器である。16 は小型の手捏土器、17～19 は高坏の脚、20～22 は壺である。20・21 は口縁で、特に 21 の壺は S 字襷の一群に伴う拡張口縁土器で県内でも足原田遺跡（山梨市）、村前東 A 遺跡（南アルプス市）等で確認されている。県史編年Ⅱ期～Ⅲ期の物とみられる。22 は底部で被熱している。23～29 は S 字襷で、23・24 は口縁～体部が残存し、縦位のハケメを有している。25 は小破片であるものの、横位のハケメが縦位を横断しておりⅡ期以前の肩部と推測される。26～29 は脚部で、26 を除いて裾が折り返される。

[時期] 検出状況や出土遺物から古墳時代前期中葉（Ⅱ期）～前期後葉（Ⅲ期）とみられる。

B-2 地点

SD2 (溝) (第・16 図、図版6・31)

[位置] 調査地点の北東側に位置し、掘方の東側は調査地点外へと延伸する。

[形状・規模] A-2、B-1 地点から連続する溝である。調査地点外に延びるため平面形の全容は不明である。上面は大きく広がっている。

[検出状況・埋土] 地山上面で検出した。埋土は黒褐色シルト質粘土を基調とし、溝下半部には礫・石が堆積している。

[出土遺物] 土器が 9 点出土しており、そのうち 2 点を図示した。30・31 は土師器で 30 は器台で、31 は高坏である。摩耗が激しく調整の観察が困難である。

[時期] A-2・B-1 地点から連続する遺構であることや出土遺物から古墳時代前期中葉（Ⅱ期）～前期後葉（Ⅲ期）とみられる。

SX1 (第13・14・16 図)

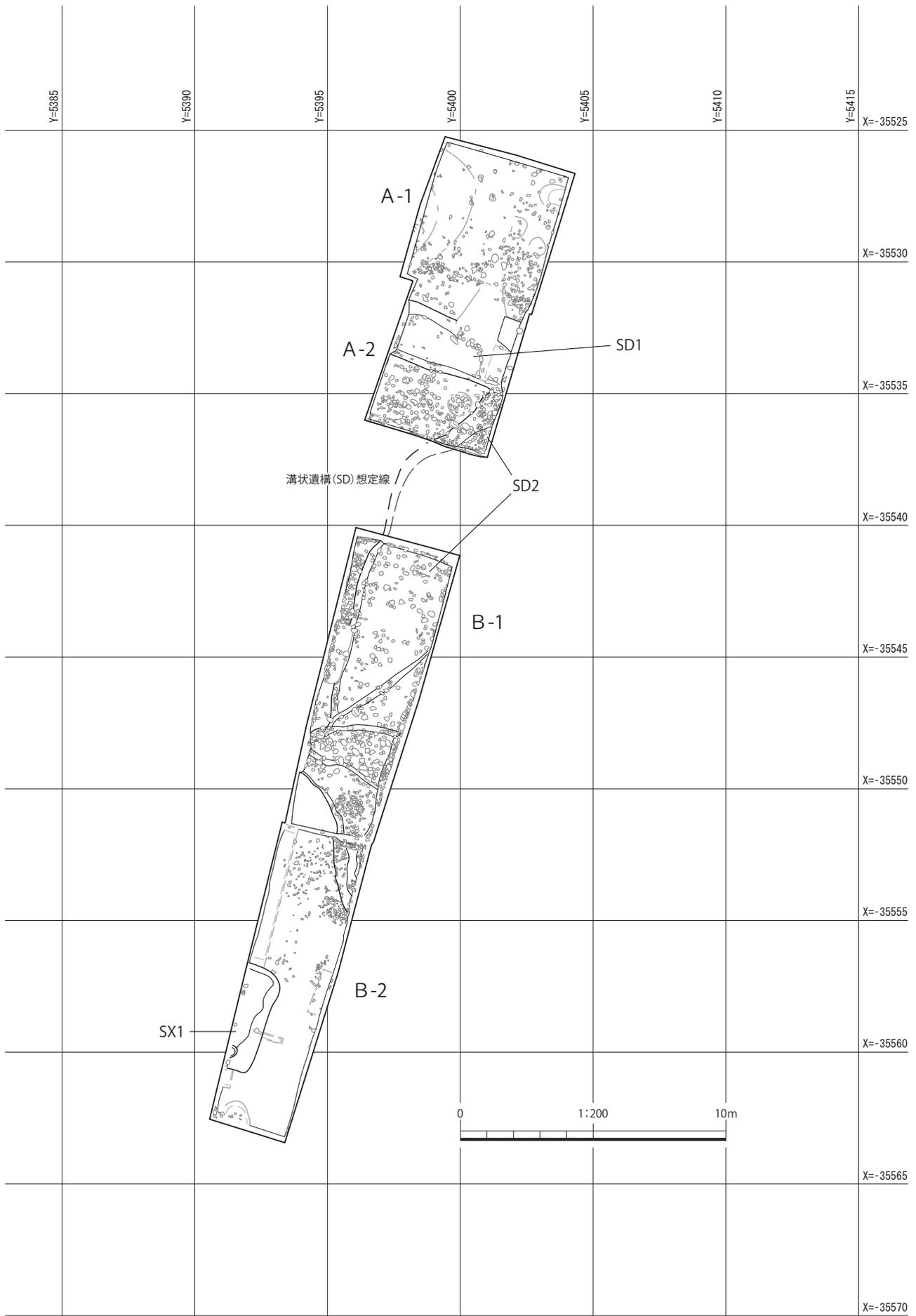
[位置] 調査地点の南西部に位置する。

[形状・規模] 調査区外に延びるため平面形の全容は不明だが四角形を呈するとみられる。長辺 4 m、短辺 1 m、深さ 30cm を測る。

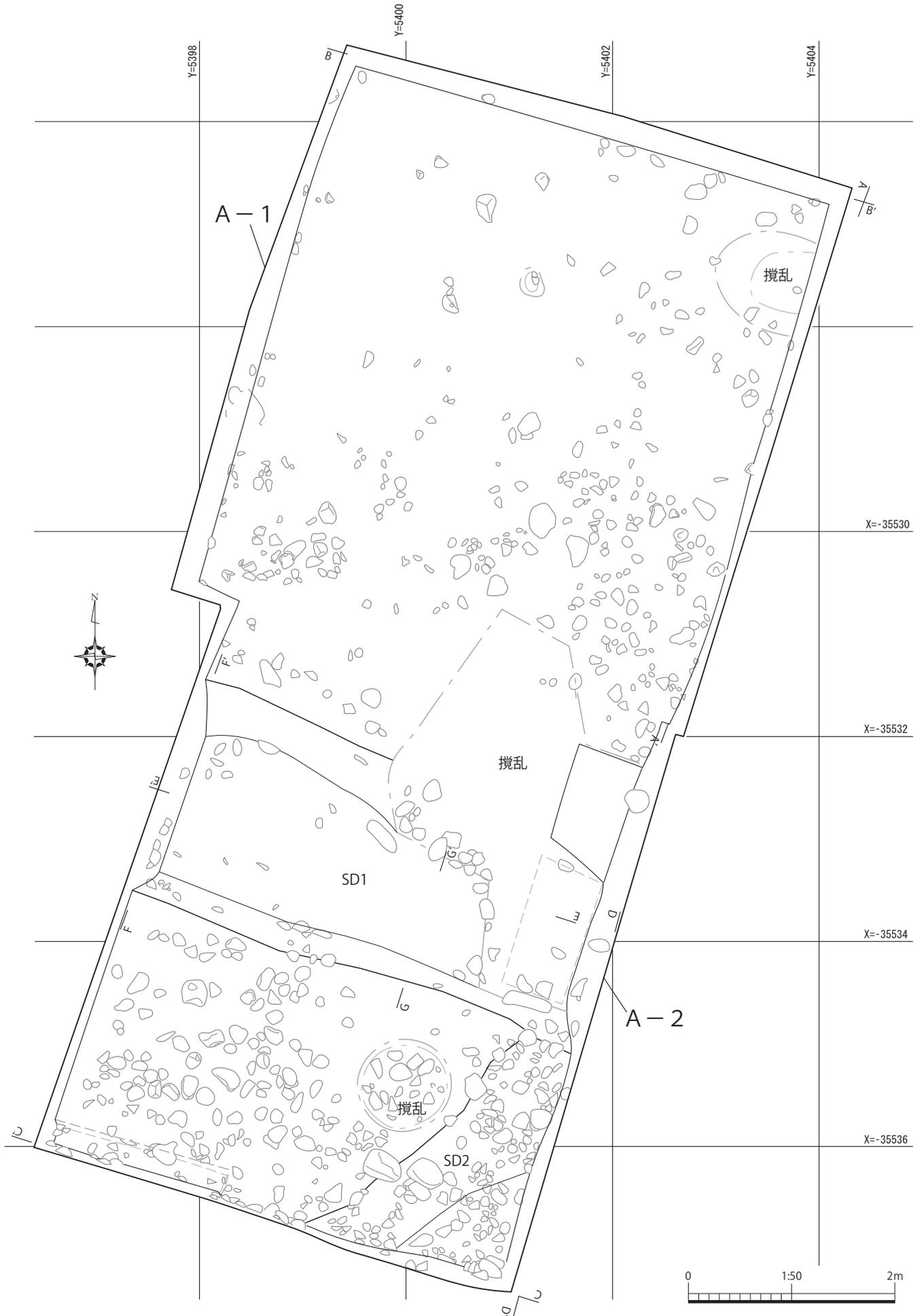
[検出状況・埋土] 地山上面で検出した。埋土は灰黄褐色中粒砂を基調としている。

[出土遺物] 土器が 4 点出土している。

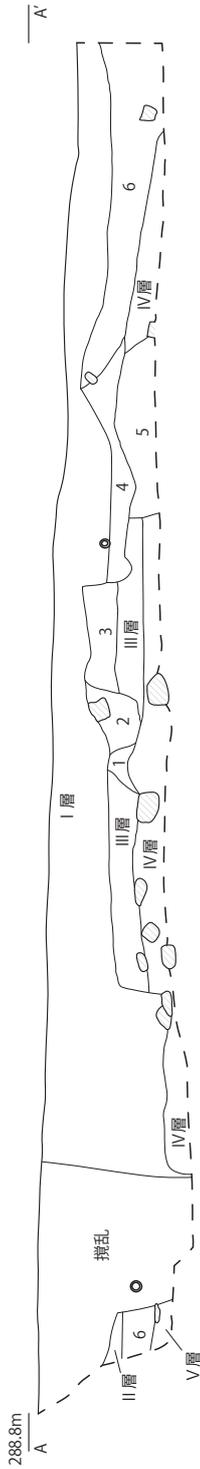
[時期] 時期は不明である。



第5図 調査区全体図

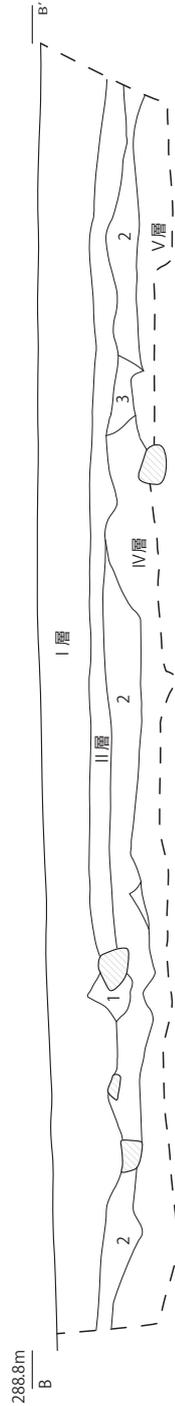


第6図 A地点遺構図(1)



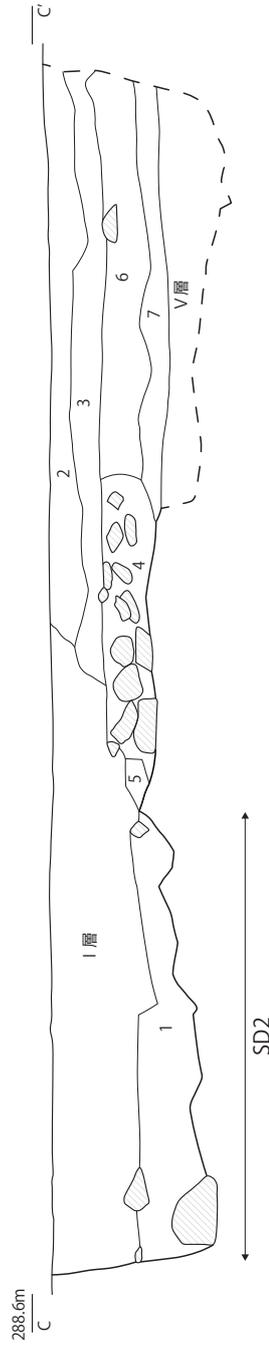
東壁セクション

- 1 灰黄褐色 (10Y4/2) シルト質粘土 焼土 5%混じる
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 炭化物 10%混じる 白色粒 5%混じる
- 3 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 焼土・炭化物 5%混じる
- 4 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土 焼土・炭化物 5%混じる
- 5 黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂 焼土 5%混じる 炭化物 10%混じる
- 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土 径 5 cm石を 5%含む 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト質粘土 20%混じる



北壁セクション

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト 径 2～5 cm礫多数 攪乱ブロックか
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土 径 1～3 cm礫・径 5 cm石を 20%含む
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質粘土 焼土 5%含む 径 5 cm大石を 1%含む



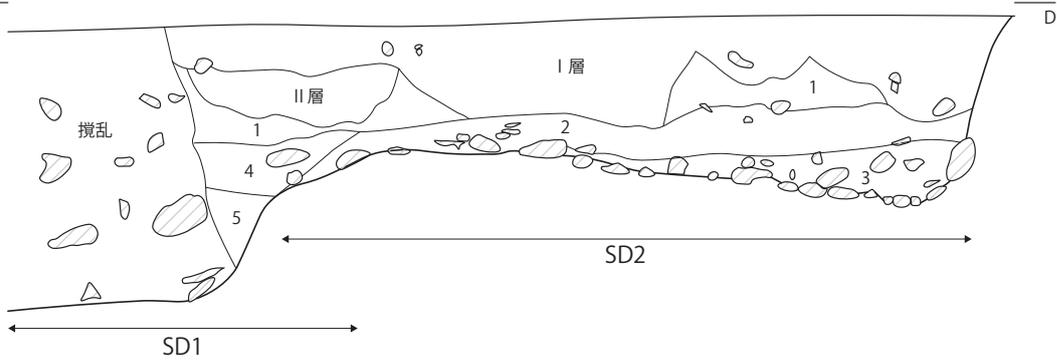
南壁セクション

- 1 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 風化した石 1%含む 白色粒 10%含む 径 10 cm大の石 20%含む [SD2 埋土]
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト
- 3 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 炭化物 5%含む 焼土 2%含む 径 1～3 cm大の石 5%含む
- 4 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト 石 30%含む 炭化物 5%含む
- 5 黒褐色 (10YR3/4) 砂質シルト 風化した石 5%含む
- 6 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土 径 1～3 cm石 5%含む 酸化した土 3%含む
- 7 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 酸化した土 3%含む 白色粒 10%含む 径 5 cm大の石 5%含む



第7図 A地点遺構図(2)

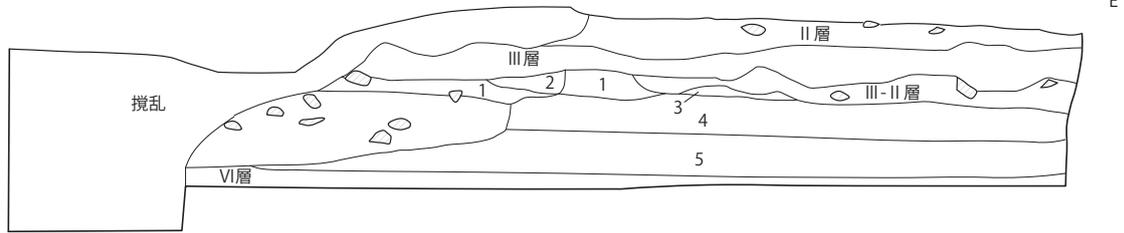
289.0m
D



東壁セクション

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 径 5 cm大の石を 5 %含む
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 風化した石 20%含む [SD2 埋土]
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト [SD2 埋土]
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 径 3 ~ 5 cmの礫 20%含む [SD1 埋土]
- 5 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト 白色粒含む [SD1 埋土]

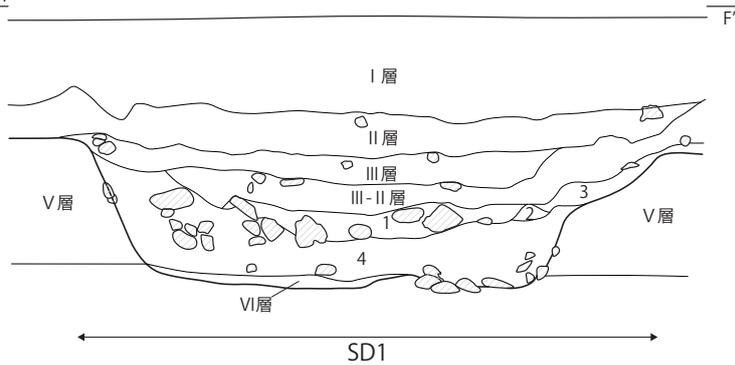
288.3m
E



SD1 ベルト南壁セクション

- 1 黒色 (10YR2/1) シルト質粘土 風化した石 5%含む 径 5 cm大石を含む 白色粒 1%含む
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 風化した石 1%含む 白色粒 1%含む
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト質粘土 風化した石 5%含む 径 5 cm大の石を含む 白色粒 1%含む
- 4 黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂 径 1 ~ 5 cm礫を 20%に含む
- 5 黒褐色 (10YR3/1) 粘土 径 10 cm大の石 20%含む
- 6 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土 風化した石 20%含む

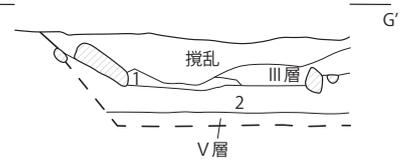
288.6m
F



SD1・西壁セクション

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘土 径 10 cm大の石 20%含む
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 風化した石 5%含む
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 砂質シルト 灰黄褐色細粒砂を 20%含む
- 4 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土 風化した石 20%含む

288.2m
G

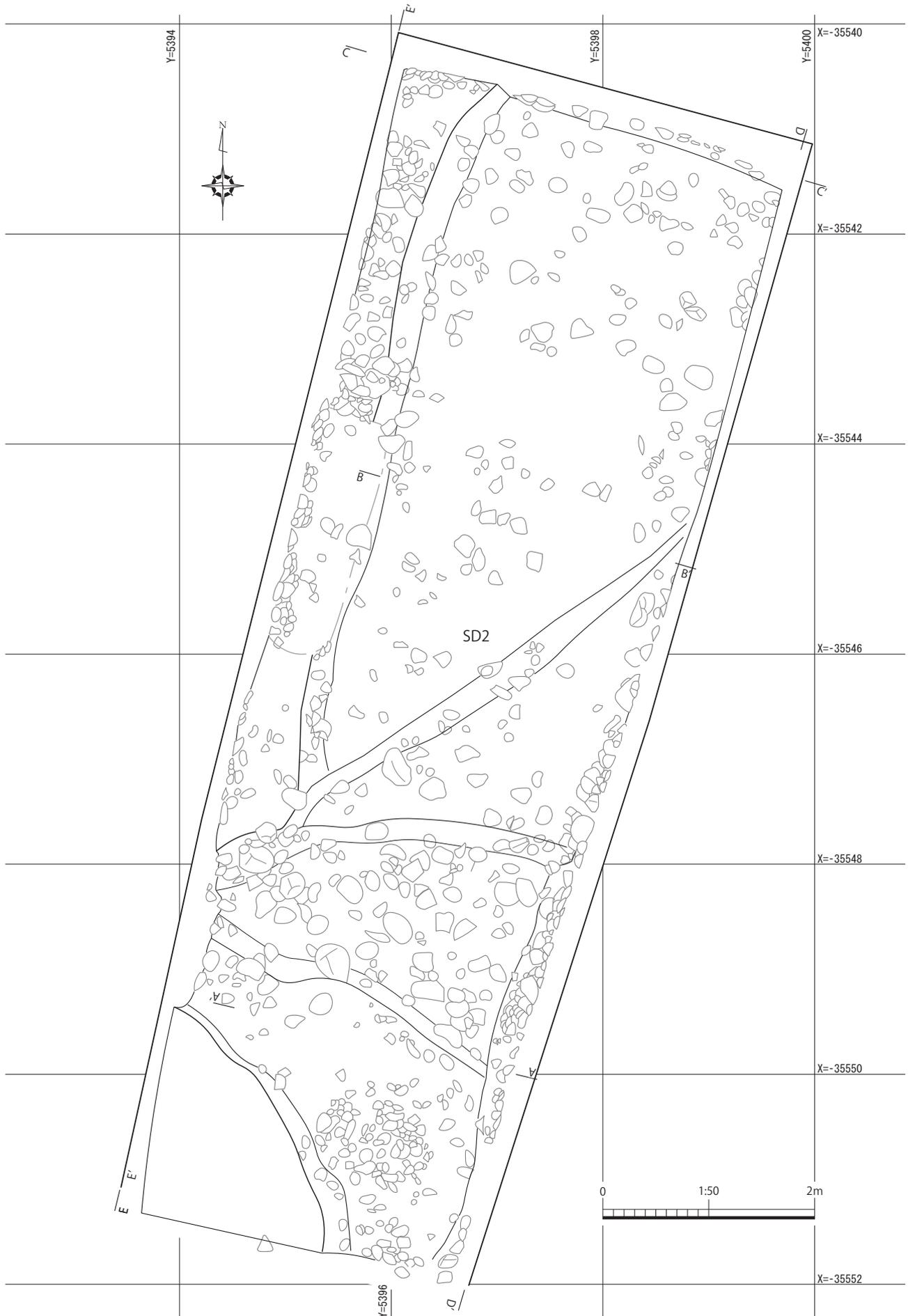


サブレンチ西壁セクション

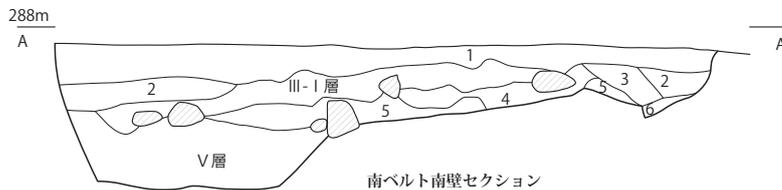
- 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘土 径 5 cm大の石 10%含む
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 風化した石 1%含む 白色粒 1%含む



第8図 A地点遺構図(3)

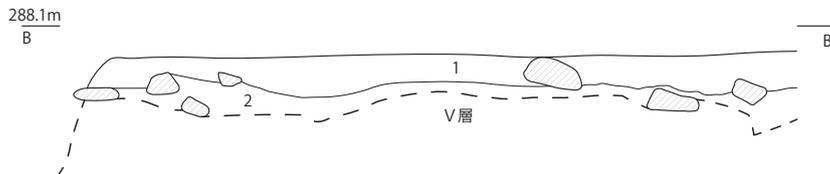


第9図 B-1地点遺構図(1)



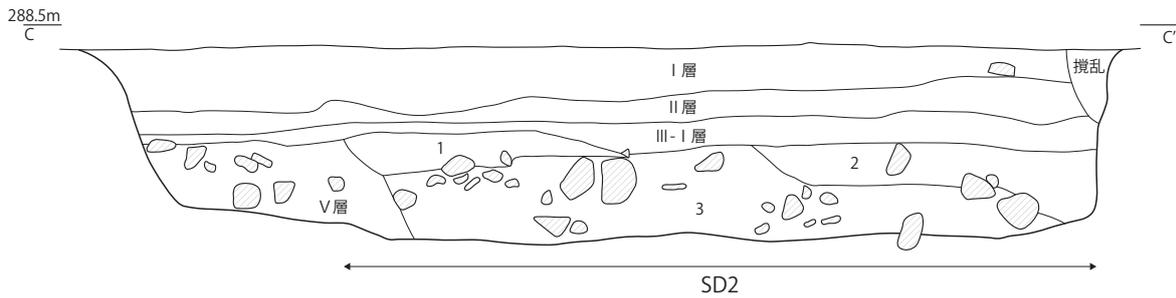
南ベルト南壁セクション

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土 径3~5cm大の石5%含む 白色粒5%含む [SD2埋土]
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト質粘土 白色粒10%含む 風化した石3%含む [SD2埋土]
- 3 黒色 (10YR2/1) シルト質粘土 径3~5cm大の石5%含む 酸化土3%含む [SD2埋土]
- 4 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土 径3~5cm大の石5%含む 酸化土20%含む [SD2埋土]
- 5 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土 径3~5cm大の石10%含む 締まりゆるい [SD2埋土]
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 風化した石3%含む [SD2埋土]



北ベルト北壁セクション

- 1 黒 (10YR2/1) 砂質シルト 径5cm礫5%含む 風化した石10%含む 白色粒10%含む [SD2埋土]
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 風化した石20%含む 酸化した土10%含む 白色粒5%含む [SD2埋土]

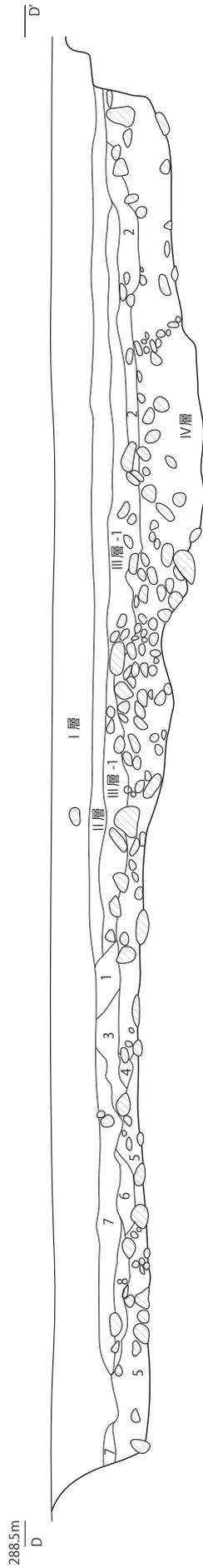


北壁セクション

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 径1~3cm礫5%含む [SD2埋土]
- 2 黒色 (10YR2/1) シルト質粘土 白色粒10%含む 酸化した土10%含む 径1~3cm礫5%含む [SD2埋土]
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 5cm石20%含む [SD2埋土]

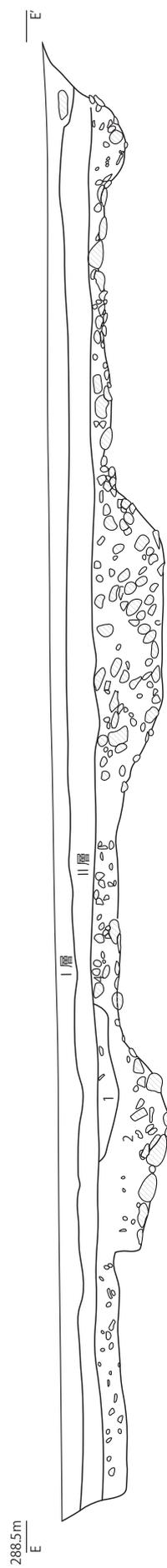


第10図 B-1 地点遺構図(2)



東壁セクション

- 1 黒色 (10YR1.7/1) 砂質シルト 酸化土 5% 含む [SD2 埋土]
- 2 黒色 (2.5Y2/1) シルト質粘土 径 5 cm 大の石 10% 含む [SD2 埋土]
- 3 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト質粘土 酸化土 10% 含む [SD2 埋土]
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 酸化土 10% 含む 径 5 cm 大の石 5% 含む [SD2 埋土]
- 5 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂 5 cm 石 20% 含む [SD2 埋土]
- 6 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 白色粒 1% 含む [SD2 埋土]
- 7 黒色 (10YR2/1) シルト質粘土 白色粒 10% 含む 酸化した土 10% 含む 径 1 ~ 3 cm 礫 5% 含む [SD2 埋土]
- 8 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 風化した石 5% 含む 酸化土 10% 含む [SD2 埋土]

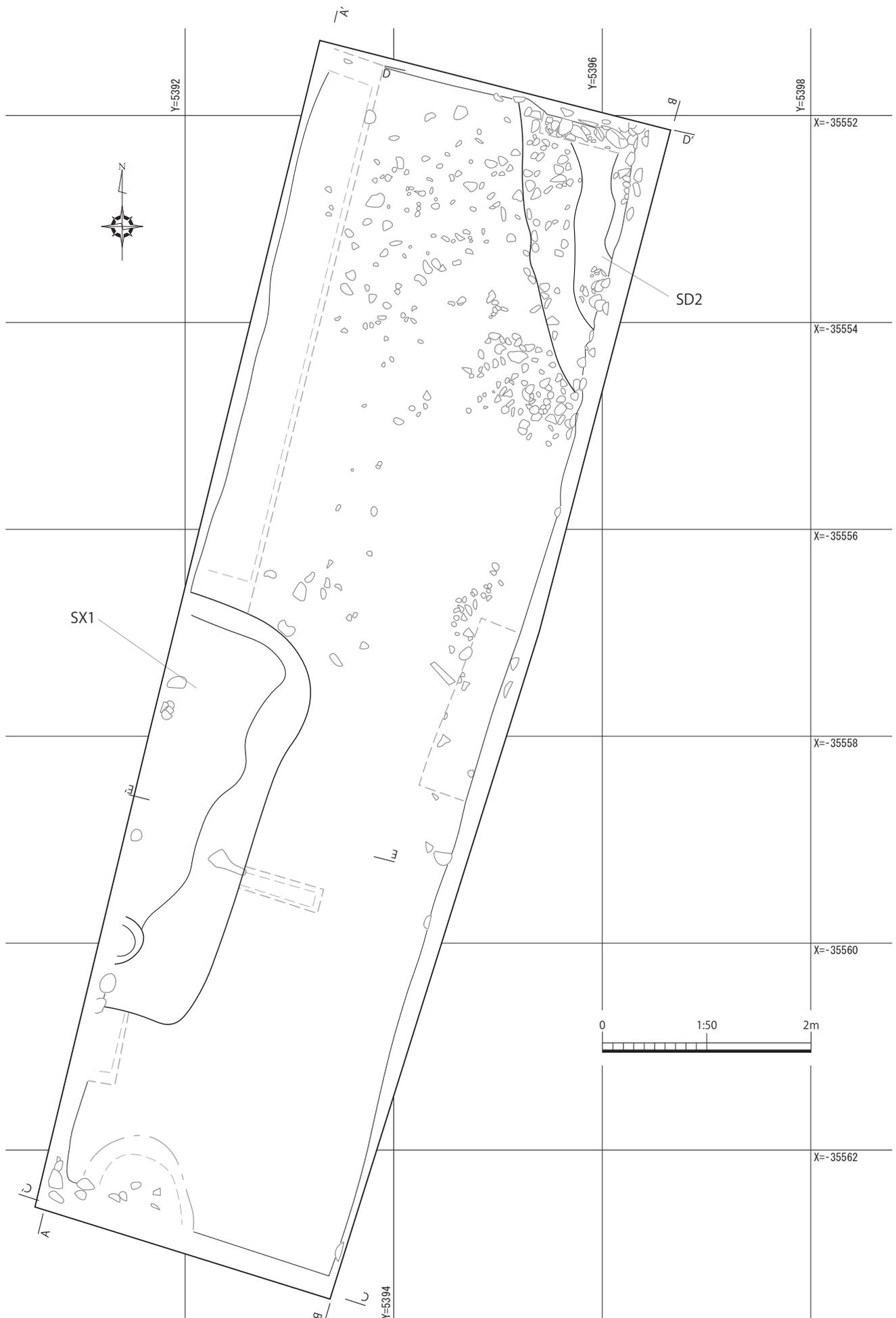


調査区西壁セクション

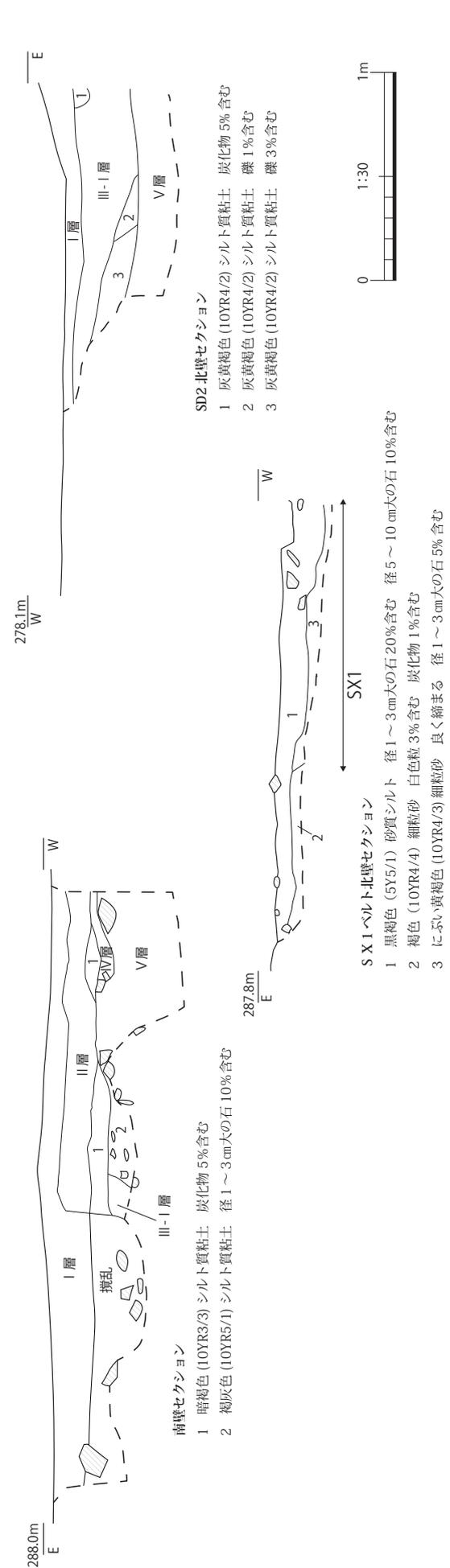
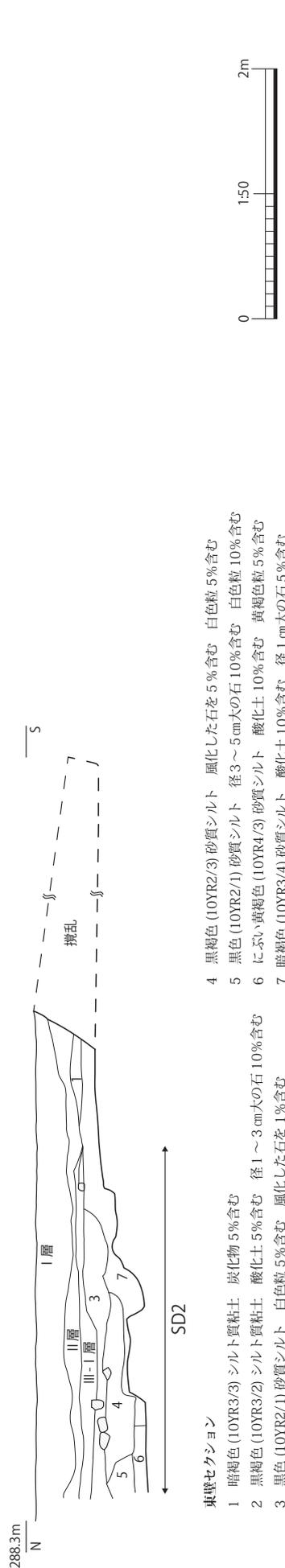
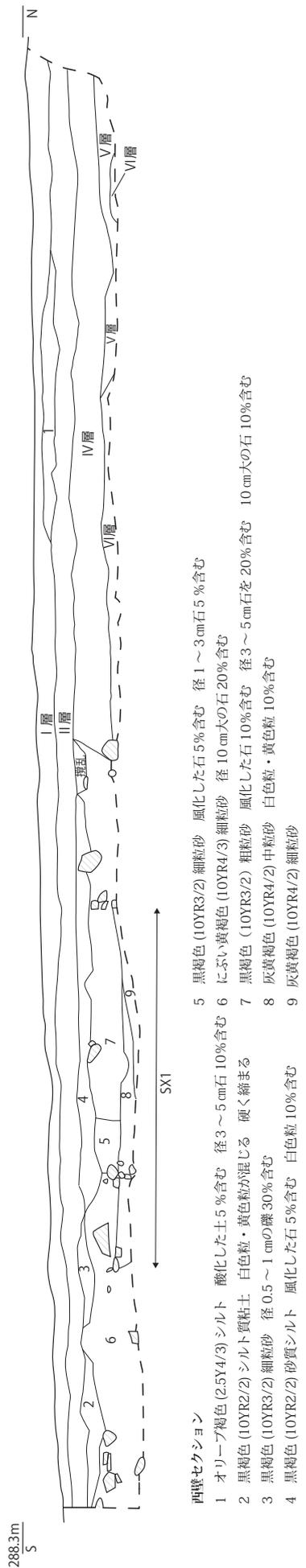
- 1 黒色 (10YR2/1) シルト質粘土 風化した石 5% 含む 径 3 ~ 5 cm 大の石 5% 含む [SD2 埋土]
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 酸化土 20.5% 含む 径 10 cm 大の石 20% 含む [SD2 埋土]



第11図 B-1 地点遺構図(3)

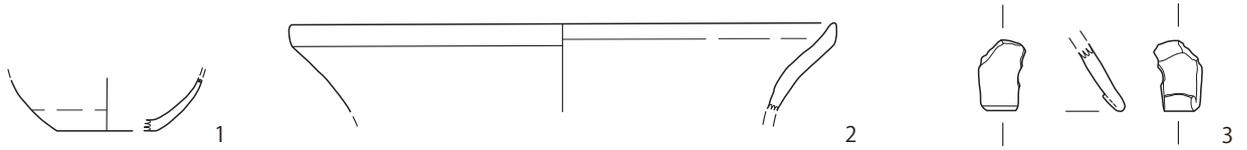


第12図 B-2地点遺構図(1)



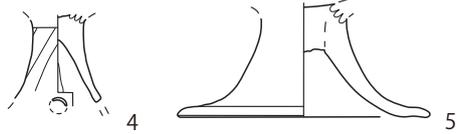
第13図 B-2地点遺構図(2)

A-1 地点



A-2 地点

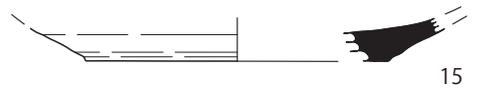
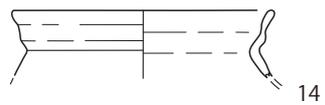
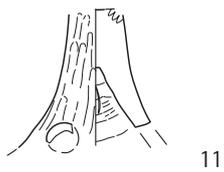
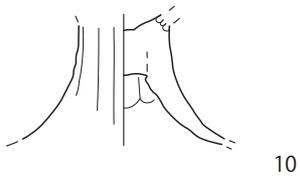
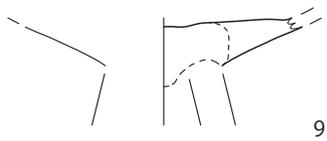
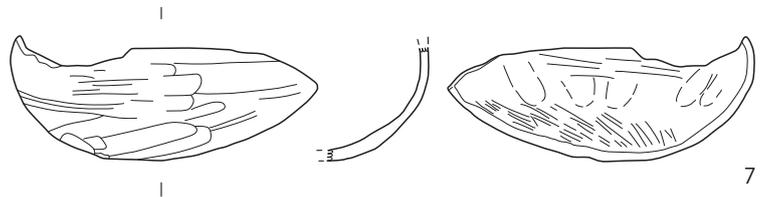
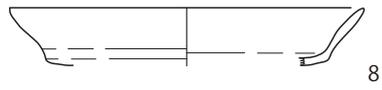
SD 1



SD 2

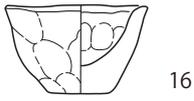


遺構外



第 14 図 遺構出土遺物 (1)

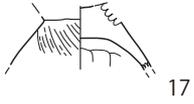
B-1地点
SD2



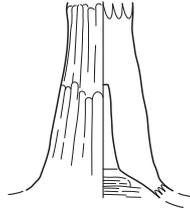
16



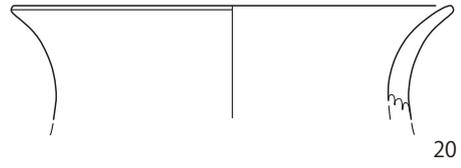
18



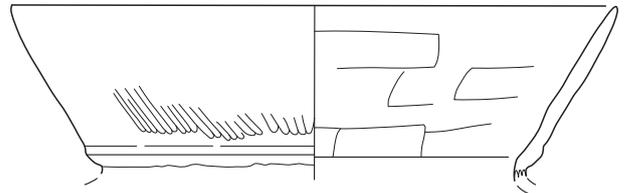
17



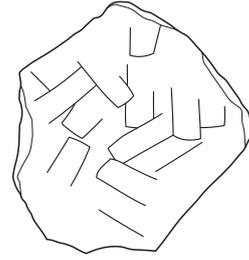
19



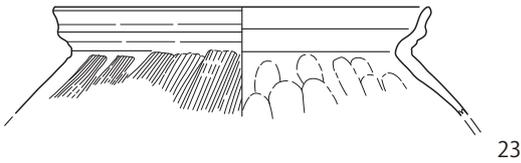
20



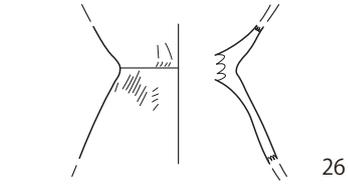
21



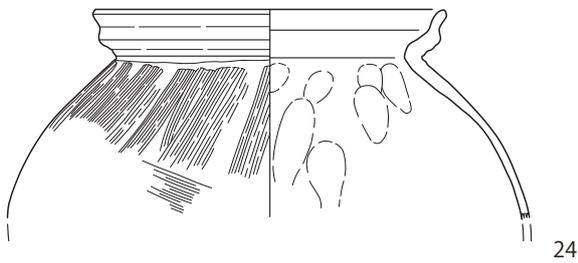
22



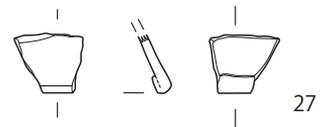
23



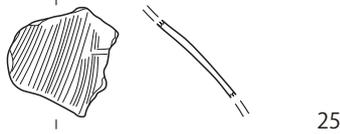
26



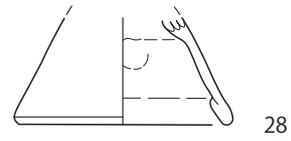
24



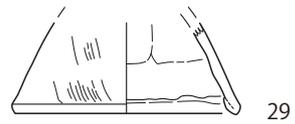
27



25

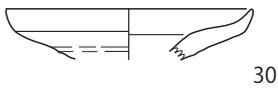


28

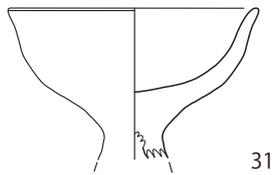


29

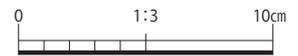
B-2地点
SD2



30



31



第15図 遺構出土遺物(2)

第2表 遺物観察表

報告番号	挿図	写真 図版	出土地点	種別	器形	法量 (cm)			部位	整形・調整技法			胎土色調		胎土含有物	焼成	備考	推定年代 (歴史編年)
						A	B	C		内面(裏面)	外面(表面)	底部	内面	外面				
1			遺構外	土師器	鉢	—	(4.0)	<2.1>	底部小片	ナデ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	赤褐色粒	良好		古墳Ⅲ期	
2			遺構外	土師器	壺	(21.6)	—	<3.5>	口縁小片	ナデ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	白・黒・赤褐色粒	良好		古墳Ⅳ期	
3			遺構外	土師器	台付甕(S字状口縁)	—	—	<2.7>	脚部	折返し、ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	白・黒・赤褐色粒	良好	破片	古墳Ⅲ期以前	
4			SD1	土師器	高坏	—	—	<3.6>	脚部	ナデ	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	白・黒・赤褐色粒	良好		古墳Ⅲ期	
5			SD1	土師器	高坏	—	(9.8)	<4.5>	脚部	ナデ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	黒・赤褐色粒	良好	※1粘土塊で穴を塞いだ痕跡	古墳Ⅲ期か	
6			SD2	土師器	台付甕	—	—	<2.3>	脚部(付根)	指頭痕、ナデ	ハケメ	7.5YR5/4にぶい橙	7.5YR5/4にぶい橙	白・黒色粒・金雲母	やや良			
7			SD2	土師器	壺	—	—	<4.5>	体部	ハケメ	ヘラケズリ	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	白・赤褐色粒・金雲母	やや不	指頭痕		
8			遺構外	土師器	器台	(14.0)	—	<2.3>	口縁小片	ナデ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	白・黒・赤褐色粒	良好		古墳Ⅲ期	
9			遺構外	土師器	高坏	—	—	<3.3>	体部~脚台部	ナデ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	黒・赤褐色粒	良好			
10			遺構外	土師器	高坏	—	—	<3.5>	脚部	ヘラケズリ、ナ デ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	赤褐色粒	良好	被熱石、※1		
11			遺構外	土師器	高坏	—	—	<5.5>	脚部	ナデ	ミガキ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	黒・赤褐色粒	良好	3穴遺存、※1	Ⅲ期	
12			遺構外	土師器	壺	—	—	<3.0>	頸部	指頭痕、ナデ	ハケメ	10YR4/1褐灰	7.5YR8/6浅黄橙	白・赤褐色粒・金雲母	やや不			
13			遺構外	土師器	壺	—	—	<11.6>	体部	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	10YR4/1褐灰	7.5YR8/4浅黄橙	白・赤褐色粒・金雲母	やや不			
14			遺構外	土師器	台付甕(S字状口縁)	(10.2)	—	<2.7>	口縁小片	ナデ	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	白・黒色粒・金雲母	良好		Ⅲ期	
15			遺構外	須置器	坏か	—	(12.0)	<1.7>	底部	ロクロ	ロクロ	N8/1灰白	N8/1灰白	黒色粒	良好		Ⅳ期以降	
16			SD2	土師器	手捏	(5.5)	2.5	3.4	口縁1/2~底部	指頭痕	指頭痕	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR7/2明褐灰	白・黒・赤褐色粒・金雲母	良好	埴型か、ミニチュア土器		
17			SD2	土師器	高坏	—	—	<2.6>	脚部	ナデ	ハケメ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	白・黒・赤褐色粒・金雲母	やや良		古墳Ⅲ期	
18			SD2	土師器	高坏	—	(8.2)	<4.2>	脚部小片	指頭痕、ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	白・黒・赤褐色粒・金雲母	良好	全体的に被熱、細部折返し	古墳Ⅲ期	
19			SD2	土師器	高坏	—	—	<6.1>	脚部	ナデ	ヘラケズリ、ハ ケメ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	白・黒・赤褐色粒	良好	面取、角柱	古墳Ⅳ期か	
20			SD2	土師器	高坏	—	—	<7.8>	脚柱	ミガキ	ハケメ	7.5YR7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	白・黒・赤褐色粒・金雲母	やや良	無孔、捺線部に石	古墳Ⅳ期	
21			SD2	土師器	壺	(16.8)	—	<4.3>	口縁小片	ナデ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	白・赤褐色粒	良好	表面摩耗		
22			SD2	土師器	壺	(24.0)	—	<6.9>	口縁1/4	回転ヘラケズリ	ミガキ	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	白・赤褐色粒	やや不	北陸系か	古墳Ⅲ期	
23			SD2	土師器	壺	—	5.3	<2.2>	体部小~底部	ヘラケズリ	ヘラケズリ	5YR6/8橙	5YR6/8橙	白・赤褐色粒	良好		古墳Ⅲ期以前か	
24			SD2	土師器	台付甕(S字状口縁)	(13.8)	—	<8.2>	口縁小~体部小	指頭痕、ナデ	ハケメ、ナデ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	白・黒・赤褐色粒・金雲母	良好		古墳Ⅲ期	
25			SD2	土師器	台付甕(S字状口縁)	(14.8)	—	<4.3>	口縁	指、ハケメ	ハケメ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	白・黒・赤褐色粒・金雲母	良好		古墳Ⅲ期	
26			SD2	土師器	台付甕(S字状口縁)	—	—	<3.3>	体部小	ナデ	ハケメ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	白・黒・赤褐色粒・金雲母	良好	拓本	古墳Ⅱ期か	
27			SD2	土師器	台付甕(S字状口縁)	—	—	<5.5>	脚部	指頭痕、ナデ	ハケメ	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	白・黒・赤褐色粒・金雲母	良好		古墳Ⅲ期以前か	
28			SD2	土師器	台付甕(S字状口縁)	—	—	<2.3>	脚部	折返し	—	7.5YR8/3浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	黒色粒・金雲母	良好	破片	古墳Ⅲ期以前	
29			SD2	土師器	台付甕(S字状口縁)	—	(8.8)	<3.6>	脚部1/4	折返し	ハケメ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	白・黒・赤褐色粒・金雲母	良好		古墳Ⅲ期以前か	
30			SD2	土師器	器台	(9.6)	—	<2.0>	口縁1/2~体部小	ナデ	ナデ	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	赤褐色粒	やや良	摩耗が著しい	古墳Ⅱ期か	
31			SD2	土師器	高坏	(9.8)	—	<5.9>	口縁小~体部1/3	ミガキ	ミガキ	5YR7/4にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	白・赤褐色粒	良好	摩耗が著しい	古墳Ⅲ期以前か	

第6章 総括

第1節 緑が丘二丁目遺跡の遺構について

今回の調査では古墳時代の溝状遺構が検出され、遺構に伴い遺物が出土した。

出土した遺物は大半が県史編年のⅡ～Ⅳ期（古墳時代前期後葉から中期前葉）に該当すると思われる。また緑が丘一丁目、二丁目遺跡はともに集落跡として周知されている中、本調査地点では高坏や器台の脚台部が多く、手捏のミニチュア土器が伴出するなど儀礼・祭祀に関連するものが多くみられる。これらの検出状況や切り合い関係、層位、出土遺物の推定年代などから本調査地点の性格を推定する。

A-1地点では遺構は検出されず、22点の遺物が出土した。調査地点内において複数の攪乱を受けており、特に北東部で強く攪乱を受ける。調査地点東側の表土直下30cmでは硬化面がみられるが、硬化面上からは遺物が少なく地山直上の層（Ⅳ層）からの出土が多くみられる。また、その種類も儀礼・祭祀に用いられるものが多い。その直下は河底のように頭大の石や砂礫を多量に含む地山層（Ⅴ層）が広がる。

A-2地点では東西方向・南北方向に延伸する溝状遺構（以下SD1、2）を2条検出した。

Ⅱ層土からⅢ期以前にみられる高坏の脚部と共にⅣ期以降にみられる須恵器が伴出した。このことからⅡ層は客土として持ちこまれたものと推測される。

遺構の性格として、SD2がSD1に先行することからSD2の埋没後にSD1が開口し、その後上流域から氾濫などによって多量の土砂とともに遺物の流入が発生し埋没したと想定される。

B-1地点では南北方向に延伸する幅5mの浅広の溝状遺構（SD2）を検出した。遺物包含層（Ⅲ層）から本地点出土遺物の9割以上となる101点が出土し、古墳時代前期後葉～中期前葉が殆どを占めている。三層には砂の堆積が見られず、ゆっくりと堆積していく中で遺物が混入したと推測される。その直下、Ⅳ層を掘り下げたところ複数条の溝状遺構を検出した。溝の方向、時代差は不明であるが埋土が同一であり、遺物が混入する高さが埋土の中位～下位までまばらに広がっている。このことから、氾濫等によって遺物を含む土砂が流入し埋没したものとみられる。

B-2地点では調査地点北西から南東にかけて幅1.5mの溝状遺構（SD2）を検出したほか、南西部に性格不明遺構を検出した。SD2はA-2、B-1地点から連続する遺構で、全体として緩やかに弧を描くように検出された。SX1は検討を行ったが、本調査地点で検出した他遺構に比べて浅い点、出土遺物が小片のみという点から性格不明と断じた。

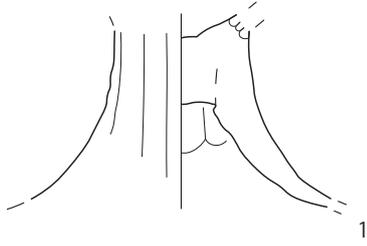
調査地点全体として、複数条の溝が重なる地点が土砂の流入によって埋没し、その後遺物が大量に投棄されたと推定される。

第2節 出土高坏にみられる成形方法

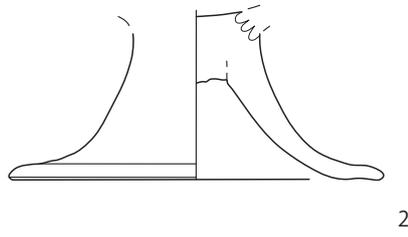
次に、本調査地点において出土した高坏について考察する。本調査地点において高坏は10点出土しているが、そのうち坏部と脚部の接合面において単純な接合を行っていないものが3点確認された。この高坏に関して、先行研究を基に考察を行いたい。

高坏の成形技法に関して福島県の2つの遺跡からそれぞれ異なる技法の高坏を確認したとして、「古宿技法」と「江平技法」と仮称し特徴が述べられている（石本 2013）。古宿技法とは内底面が平坦な坏部を作成し、坏底部から倒立状態で脚部を成形する方法である。特徴として、平坦な内底面や体部と脚部における粘土紐接合痕の逆転などが挙げられる。一方、江平技法とは内底面が播鉢状を呈するように坏部の底部を成形し、底部に穿孔を入れた後に脚部を成形していくもの、若しくは粘土紐の輪を土台とし穿孔を持つ坏部を成形する方法である。この技法の場合、脚部が乾燥したのちに粘土塊を用いて坏底部の孔を塞ぐ。特徴として、内底面が播鉢状に凹み脚部の裾が広がる形状であること、また内底面が平坦の場合でも中央に浅いくぼみがあり脚基部内部に突起があるもの、脚部の外れた跡が突起型になっているものが挙げられる。

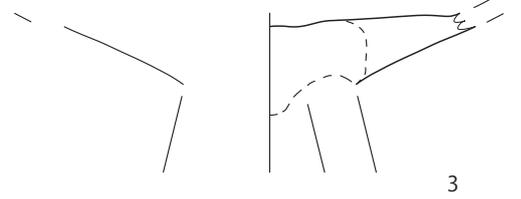
本遺跡で出土した高坏のうち、図17-1（A-2地点SD1）は坏部内底面が凹み、亀裂を伴っている。また



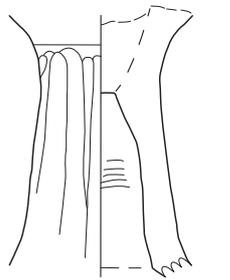
Ⅲ期（前期後葉）



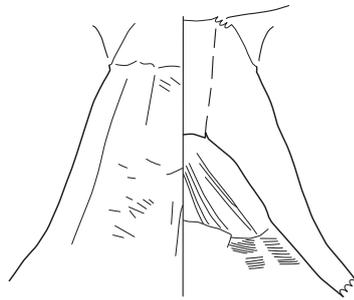
Ⅲ期（前期後葉）



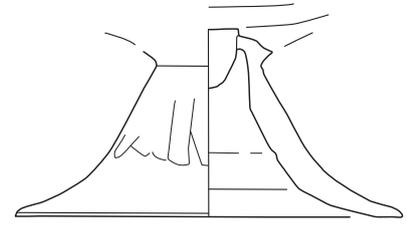
Ⅲ期（前期後葉）



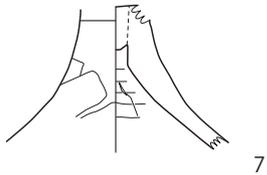
V期（中期中葉）出土



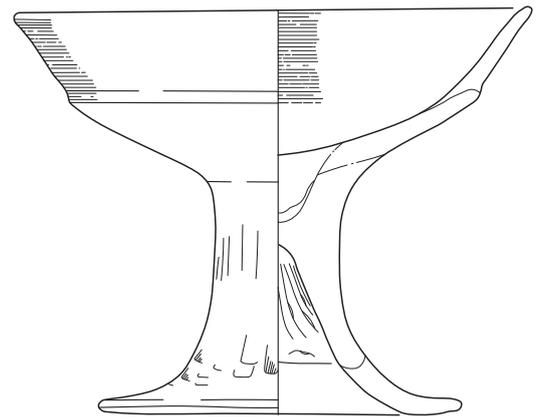
V期（中期中葉）出土



VII~Ⅷ期（中期後葉）出土



Ⅲ~Ⅳ期（前期後葉~中期中葉）



Ⅷ期（中期後葉）



1~3 緑が丘二丁目遺跡 4~6 塩部遺跡 7 天神北遺跡 8 江平遺跡
 推定時期は山梨県史編年を元に作成 一部図に加筆

第 16 図 高杯の成形

脚部内側に粘土塊で穴を塞ぐような痕跡が残っている。一方で、図 17-2 (A-2 地点 SD 1) の高坏は内底面にヘコミや亀裂は見られないものの脚部内側に粘土塊がある他、割れ口からは脚部の内側に坏部の突起が確認される。これらは石本氏の論ずる江平技法に類似する点が見られる。図 17-3 (A-2 地点遺構外) は坏部～脚部との接続部までが遺存され、割れ目には脚部の剥離痕がみられる。

この剥離痕から直上に割れ目が入っており内底面付近で内側に湾曲する。これは粘土塊を埋め込んだ後、器面を撫でて加工したと推測され、江平技法に類似したものとわかる。またこれらと同様に江平技法に類似する遺物が周辺遺跡からも確認されており、塩部遺跡から 3 点、天神北遺跡から 1 点出土している (図 17-4~7)。4~7 は断面図から中央に粘土塊が埋め込まれていることが確認できるほか、4・5 は 1・2 と同じく内側の粘土塊が平らに加工されていることから同技法の物と推測できる。

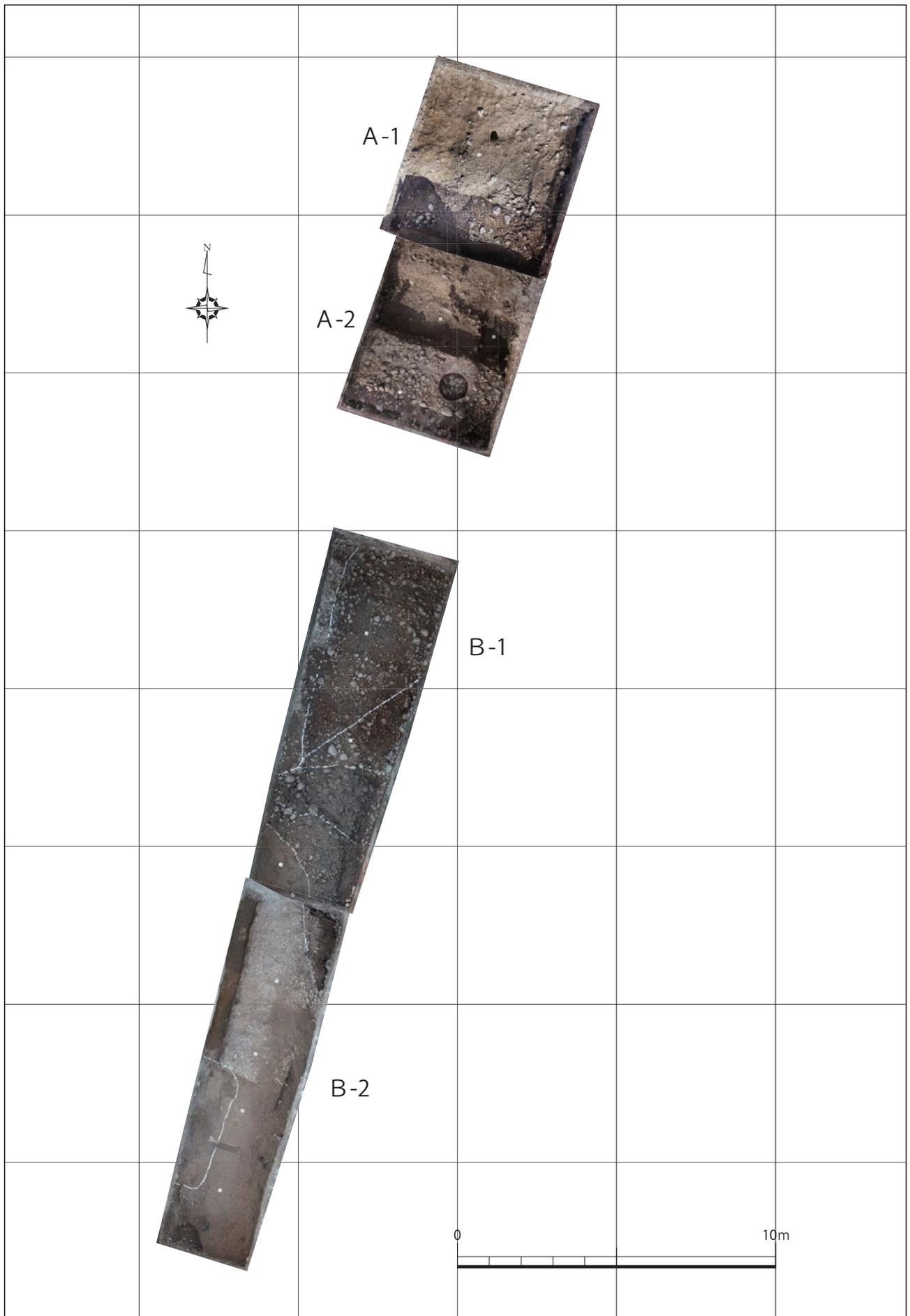
石本氏の論では江平技法は弥生時代の関東・東海地方からみられる伝統的な高坏の成形技法であるとされる。今回出土した 3 点は前期後葉の高坏であったが何れも江平技法に類似した点が見受けられた。山梨県内では古墳前期における高坏の成形に関する資料が未だ少量であるが、本書が調査・研究の一助となれば幸いである。

参考資料・文献

- 石本弘 2013 「南小泉式土師器高坏に見られる 2 種類の成形技法―復元製作体験レポート―」
『福島県文化財センター白河館 研究紀要 2013』 財団法人福島県文化振興財団
- 角川日本地名大辞典編さん委員会 1984 『角川日本地名大辞典 19 山梨県』 角川書店
- 小林健二 2015 「甲斐の古墳時代と土器―編年と移動を考える―」 『山梨県考古学協会誌 第 23 号』 山梨県考古学協会
- 西山梨郡支會 1987 『西山梨郡志』 千秋社
- 山梨県 1999 『山梨県史 資料編 2 原始・古代 2 考古 (遺構・遺物)』 山梨日日新聞社

報告書

- 甲府市教育委員会 2004 『甲府市内遺跡 I』 甲府市文化財調査報告 26
- 甲府市教育委員会 2005 『甲府市内遺跡 II』 甲府市文化財調査報告 29
- 甲府市教育委員会 2006 『甲府市内遺跡 III』 甲府市文化財調査報告 31
- 甲府市教育委員会 2008 『甲府市内遺跡 V』 甲府市文化財調査報告 38
- 甲府市教育委員会 2013 『甲府市内遺跡 IX』 甲府市文化財調査報告 63
- 甲府市教育委員会 2014 『甲府市内遺跡 X』 甲府市文化財調査報告 68
- 甲府市教育委員会 2019 『塩部遺跡 III』 甲府市文化財調査報告 105
- 甲府市教育委員会 2022 『天神北遺跡』 甲府市文化財調査報告 130
- 甲府市教育委員会 2006 『緑が丘一丁目遺跡』 甲府市文化財調査報告 32
- 甲府市教育委員会 2019 『緑が丘二丁目遺跡』 甲府市文化財調査報告 104
- 財団法人福島県文化振興事業団 2002 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告 12』 福島県文化財調査報告書 394
- 山梨市教育委員会 2019 『足原田遺跡』 山梨市文化財調査報告書 第 34 集



調査区全景（モザイク写真）



A-1 地点調査区全景 (モザイク写真)



サブトレンチ掘削状況 南から



サブトレンチセクション 西から



調査区東壁 西から



調査区北壁 南から



A-2 地点調査区全景 (モザイク写真)



完掘状況 北から



SD 2 完掘状況 から



完掘状況 西から



SD 1 断面セクション 東から



B-1・2 地点調査区全景 (モザイク写真)



B-1 地点検出状況 南から



B-2 地点検出状況 東から



B-1 地点遺物出土状況 南から



B-1 地点調査区北壁 南から



B-2 地点調査区東壁 西から



B-1 地点SD2北ベルト 南から



B-2 地点SD2北壁 南から

A-1 地点



A-2 地点



B-1 地点



16



17



18



19



20



22



21



23



24



25



26



27



28



29

B-2 地点



30



31

報告書抄録

ふりがな	みどりがおか2ちょうめいせき（やまなしけんこうふしみどりがおか2ちょうめ2-12ちてん）
書名	緑が丘二丁目遺跡（山梨県甲府市緑が丘2丁目2-12地点）
副書名	都市計画道路新環状・緑が丘アクセス線街路事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	131
編著者	藤巻浩太郎・平塚洋一
編集機関	昭和測量株式会社
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号 TEL055-235-4448
発行年月日	2023(令和5)年1月31日

ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
みどりがおか2ちょうめいせき	やまなしけんこうふしみどりがおか2ちょうめ2-12							
緑が丘二丁目遺跡	山梨県甲府市緑が丘2丁目2-12	19201	42	35° 67'96"	138° 55'96"	20211105 ~20211213	102m ²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
緑が丘二丁目遺跡	集落跡	古墳	溝状遺構など	土師器、須恵器など	特になし

要約	<p>調査地点は緑が丘二丁目遺跡に隣接するが、道路建設に伴う試掘により遺跡と判断された。近世まで農耕地であったが明治40年には第49連隊の練兵場となっていた。本調査地点では東西方向・南北方向に延伸する溝状遺構2条を検出した。埋没時期は伴出土器等から古墳時代前期から中期のものとして推定される。また出土した高坏から、古墳時代前期後葉から中期前葉における成形技法の一端を伺うことが出来る。</p>
----	--

甲府市文化財調査報告131

緑が丘二丁目遺跡

（山梨県甲府市緑が丘2丁目2-12地点）

—都市計画道路新環状・緑が丘アクセス線街路事業に伴う発掘調査報告書—

2023(令和5)年1月31日 発行

編集 昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL 055-235-4448

発行 中北建設事業所・甲府市教育委員会・昭和測量株式会社

印刷 株式会社内田印刷所